

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年
1月号
通巻533号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



法主様、身延山日蓮聖人草庵跡にて



▲生母さん(中央)と同行の皆さん
昭和44(1969)年10月20日「法主様母堂(生母さん)を連れて身延山、伊豆方面に行かる。この日身延山で一泊」、21日「身延山久遠寺に詣らる。日蓮聖人草庵の跡へ詣られ、伊豆熱川に泊らる」——当時の新聞『すさのお』、法主日誌抄より

森下 新蔵さん撮影(文・2頁参照)

平成3(1991)年8月26日 法主様と拝殿にて座談会 いつもここにいる〔5・最終回〕

法主 矢追日聖(満79歳)

参加者

石垣雅設・清水、手塚賢至・田津子、
中健次郎、林修三、中西貴美子、
樋口寿子、森田好子、工藤美代子

日蓮

法主…林さんも中さんも、ええとこ行つてはねえな。あんたら二人と話しとつたら、神ながらそのものやねえ。やっぱり中国の聖者とか大人(おとな)いう人は、我々がいう自然主義的な考え方もってはるんやろなあ。

中…ほんとそうです。

法主…そういう意味では日本の古代の人、中国の経験的なものを随分受け取つてると思うんや。聖徳太子は特にそうやと思う。中国のええところをとってはる。仏教の過去のお坊さんで、私のところへいつも出て来て、いろんなこと指示されるのは日蓮さんだけです。

中…そうですか。

法主…うん。弘法大師と、蓮如もちよつと来るしね。親鸞とか全然来ませんわ。

日蓮いう人も幅の広い人やなあと思うよ。あんな日蓮宗の宗祖に置いといたら具合悪いわ。

一同…はあ、そうですか。

法主…あの人は仏教の宗祖とかそんな狭い人と違うよ。政治家でもあるやろし思想家でもある。そらやっぱり学識のある人やなあ。鎌倉時代に將軍に対してでも平気で罵倒するような人やから、偉い人やと思うで(笑)。あの人は随分、神秘

的に助かっているわな。あれも神ながらやけどねえ。龍ノ口であわや斬首という時に命助かって、結局、佐渡へ流されてるんやからね。

私もこの間——今年の六月二十四日から三十日まで日蓮の生きたった時の足跡ばかり訪ねて、佐渡へ遊びに行ってきた。

霊魂というのは障害がないから、ここにおったかて、しょっちゅう日蓮の霊と話せますけれど、生きてた時の日蓮の足跡には、生きてた時の念が置いてあるねん。

中：それは霊的スポットというか、場所が大事なんですか。

法主：「遊びに来て」とよう呼ばれることあるねん。身延山も今日まで何回も行きました。

林：鎌倉にも龍口寺という、日蓮さんと縁のあるお寺がありますが……。

法主：そうそう、龍口寺にも何回か行ってますけど、お寺の中には入ったことあらへん。

身延へ行ってきたかてお堂にのぼったことあります。日蓮の住まわっていた西谷の草庵の跡に、大きな檜の木があって、そこにいつも遊びに行くねん(表紙写真参照)。あほみたいにバターンと座って遊んどんねん。前に深敬園というライ園があるとこや。旅館はたいてい下の梅屋。一週間位泊まって、また朝から遊びに行つてということもあつたよ。

中：お話をされるわけですね。
法主：します。キンキラのあんな御堂みたいなのはのぼったことあらへん。私はそんな変なところがあるねん(笑)。

日蓮のところへ行つても、気持ちの中で仏教の宗祖という感じあらへんし。

聖徳太子でも宗教家なんか政治家なんか分からん、戦争もしたんやしね。

崇徳上皇、後醍醐天皇、足利尊氏

法主：だけどあの人、天皇にならんでよかつたと思う。天皇になつてたら殺されてたわ。崇徳天皇(※第三十二代天皇で聖徳太子の叔父。太子は第三十三代となつた叔母の推古天皇の摂政)は殺されたけどね。だからその人なりのお役目というのが皆あんねんな。

斑鳩の聖徳太子いうたら日本では後光さして偉い人に見えるけど、あの人の晩年は精神的には気の毒やで。今の法隆寺は観光対象で、金儲けになつてるんちがうかと思うけど、法隆寺は、いつてみたら聖徳太子の鎮魂のお寺です。そら周囲の生き残つてる人は皆分かつてますがな、後の祟りが恐ろしい。

林：隠された十字架ですねえ。(※梅原猛著『隠された十字架 法隆寺論』という本がある)

法主：祟りが恐ろしいから、あんな大きな立派なお寺を建てて謝罪しとんねん。ひとつの御霊信仰やで。

立派な人やと皆言うてるけど、人間としての末路を見た時、気の毒やなあとと思うわ。霊界で視つたら、いろいろありますよ。皇室に生まれてなれば何しはつたか知らんけど。

石垣：出て来る時の姿は、大体亡くなつた頃の姿なんですか。

法主：それが一番多いですね。太子さんは五十歳位やろ。もつと長生きしはつたらよかつたけども、出て来る姿が私よりはるかに若い。私は八十まで生きさしてもらつて結構やなあとと思う。

石垣：そうでない姿で現われることもあるわけですか。

法主：生まれてから死ぬまでの相があります。例

えば八尾に行つた時に出て来るのは、やつぱり二十歳までの姿やわな。その時の心で出て来る。佐渡へ行つたかて、日蓮が五十歳位の時やつたから、その時の雪の中で苦勞した姿で出て来るわな。

だからやつぱり行くことによつて相手が慰められるんやわな。それで呼ばれますねん。

四国の崇徳上皇の白峰陵へでも何回か行つてますよ。あの人は天皇やけども、悪魔となつて日本の国を呪うと言つて死んだ人やからね。

霊界は一つやから、霊界で苦しい人はたいいてい大倭へ出て来て、私は呼ばれるから、それで遊びに行くんやけどね。

隠岐は後鳥羽上皇が流されたところや、一回しか行つてないけどね。

今テレビの『太平記』で後醍醐天皇のことやつとるけど、あんた達、見てる?

足利尊氏も可哀そうな人や、一生の動きをドラマに出してとるけどね。なんぼ尊氏が天皇のためになつていても、あんなややこしい逆賊みたいな立場になつてしまふし、それは自然の流れやねん。あれ見とつたら運命というのが分かるやろ。

『太平記』はうまいこと書いてとんのう(笑)。

足利尊氏は悪い人でもなけりや、天皇陛下に逆うた人でもないしね。だけどころなつてしまつてるんやなあ。我々の学生の時は、足利尊氏いうたら逆賊の張本人やもんね。

ところが京都に天龍寺という大きなお寺が建つてるでしょ。あれは後醍醐天皇を弔うために、ご供養の意味で、足利尊氏が建てたんや。そやから勤皇の思想を持つてた人やけれども、時の流れが逆賊にしてしまつたんやわな。その点、今度のテレビの『太平記』なんか、よう出しとる。日曜日に、たいいてい見とんねん(笑)。

楠木正行まさちか

法主…ぼつぼつ時間が来ましたね。ただもう雑談ばかりやったけど、そんな中で何か参考になるものがあつたら取つてもよろたら結構やしな。

中…はい。ありがとうございます。

法主…しっかり名前覚えとかな。じきに名前忘れるさかい。

中…中国の中です。まん中の中ですので覚えやすいと思います。

林…林修三です。

法主…どっちも一文字同士やな。また中国に行くの？

中…私はまた九月に行きます。

法主…身体に気を付けてね。あんたは？

林…私は大阪の北浜で学校をやっています、四糸しじょう騒さわというところに住んでいます。昨日も行って来たんですが、楠木正行のお墓があつて立派な楠の木がありますね。あの方も立派な方で。

法主…四糸騒のお宮さん、あんなあかんで、かたつぽやけどね。ほんまの正行の霊魂は近鉄の瓢箪山ひょうたんやまの上の原っぱ—あそこが昔戦争した時のほんまの四糸騒なんや—、そこからもうちょっと南に下つたところに往生院おんじやういんというお寺があつて、そこで正行は戦死してゐるねん。私も何べんも

行つてゐるけどね。瓢箪山ひょうたんやまの上の辺りや。

とところが、向こうの飯盛山いひもりのやまの方が政治力強かつたから、お宮さんを作る時に瓢箪山でなしに飯盛山の方へいってしまつたんや。

林…申し訳わけございません(笑)。

法主…いやいや。どこへ行ったかて、霊は拝んだとこで来るねんからええのやけども。

法主…手塚さん、この頃、屋久島の縄文杉が有名

なつてゐるねえ。テレビなんかでよう紹介してま

すよ。観光対象になつとんのとちがうの？

手塚…そうですね、そういう面もあります。あんまり観光の対象にしたいくないですね。

法主…土地の人はそう思うわね。あんな荒らすだけやわなあ。

霊界と現界のつなぎ合わせ

石垣…法主さん、お忙しい時にすいませんが、娘さんの家のことで……。

樋口…最近、私の娘が古い農家をお借りすることになりました。場所は九州小倉の、古戦場のたくさんある所なんです。家はすぐく荒れておりますので、娘の連れ合いは見ただけで嫌だと言つてひと悶着もんぢやうありました。

しかし、その家の大きさや持つております氣に、私自身が非常に惹かれる想いがございまして。同時に、もっといい形で村人達の集まりの場所になつて、その建物も生き返つて欲しいなと。

一旦娘の友達が一年程引き受けて下さつてから娘が入りました。その時に、身震みゆぶいするような靈氣を感じまして、私も非常に納得いたす部分がございます。

法主…誰も人住んでないの？

樋口…はい。

法主…何か戦争あつたんかいな？ 戦かなんかで死んでる高級な人の靈氣が出て来るな。

樋口…たくさんさんの源平の人達の終焉しゆんげんの場所でございます。

法主…出て来てゐるのは、割合、戦国時代位の人かな。かなり上の位の人やわ。こんなこと言うたら脅かすことになるけども、このままここで生活したらあんまりいいことない、禍わざわいが出て来るよ。

青森の高橋延之・末子さんのとこの場合でも、ちゃんとお祀りもしたからそこに住まいできてるんやけどな。肉体持たない人間である靈界人から言うたら、自分がそこで亡くなつてゐる場所やから自分の住まいやわな。そこへ肉体の持つてゐる人間がお構まいなしに勝手に入つて来ることになるんやからね。

固有靈は人間と同じ心を持つています。戦で死んでる人やから、我々よりもつときつい恨みつらみを持つてゐる。そのうつぶん晴らしを、住まいした人のところへもつていくから、不幸になるんや。けれども、それを、「私達は後から寄せてもらいます、ひとつ仲良うしましょう。あんたも家族になんない。あんたが先住者やから、お祀りします」というような立場で、ちゃんとお祀りしてあげるとみんな仲良ういけるねん。

もし、どうしてもここへ入りたいんやつたら、靈界と現界をつなぎ合わせる、そういう方向をとられたら一番いいと思う。

それにはひとつの座を作つてやらないかんねん。靈魂みたまの依代よりしろを作つてあげたら一番いいんです。御靈鎮みたましづめとか言うんやな、お社をちゃんと作つてあげる。それに対して毎日生きてる人と同じように、食べる物をお供えて、一緒に生活しましようという形にすることによって両方が救われる。

その代わりこの人はかなり力のある人やから、事業する時でも何する時でも、ご利益信仰と違ちがうけれども、いちいち報告したらいいです。「こんなことしたいけどどうですか」とか占つてみたらいいねん。それでいかなんなら「いかん」と、きつと感じてくるわ。

樋口…ありがとうございます。

法主…何かあつたらその靈界人に相談したらよろしい。ある程度、相談相手に便利やで(笑)。

肉体のある人でも八十歳位のおじいさんと一緒に生活しとったら、その人の過去の経験でいろいろ教えてくれるやろ。それと一緒にその方法が一番いいと思う。娘さんが、神さんみたいな形で祀るの嫌や言うたら仕方ないけれども、ここへ入るからには、そうしなかつた場合は結局うまくいかんやろね。

まず一番先に病気になるわ。靈魂の恨みつらみですぐに肉体のどこかを故障させる。大体、脳脊髄から入って来よるから精神的におかしくなるわ。そんな場合、事業やっけていても終いには失敗する。脅かし違う、ほんまの話やで。

私は今まで御霊鎮めたくさんしてるけど、さつき言うた青森の高橋さんこのように、アイヌ人が出て来たのは初めてやからこっちもびっくりしたわ。出て来るのがアイヌの王さんやもの。あそこで最後まで頑張ってたんやろね。高橋さんえらいとこに行きよつたなあ思ったけど、この間写真見せてもらつたらきれいに祭壇こしらえて祀つてあつたわ。アイヌの王さんが死んだ頃には、まだ青森のあの辺が多くアイヌ族の中心の拠点やつたんやろと思うわ。今は皆、北海道に追われてるけどなあ。

樋口…どうもありがとうございます。

法主…これはまたご家族で相談しなさい、いいようにねえ。

石垣…もしも娘さん夫婦がそういうことを納得されて、ご一緒に住みたいということであれば、法主さんに改めて相談されてお社に鎮魂していただいて……。

法主…うちも祀つてあるよ。靈魂は電波みたいなもんやから宇宙に全部遍満してんねんけど、何かその依代を作つた方がいいんです。ラジオでもアンテナがあれば電波は引っかかるわな。機械置い

といたら映像も映る。それと一緒に靈魂は電気みたいなもんやと思つてもらつたら一番ええねん。まあ、そういうことやわね。

今後ともお付き合いさせてもらつたら結構やし、また折があつたら遊びにおいでや。私はこの月次祭や祓会や神宮のお祭の時にはどんな支障があつたかて欠かさずおりますからね。

全員…長い時間ありがとうございます。(拍手合掌)
文責・編集部

登美之郷だより

新皇教宮のご案内

所在地

群馬県安中市原市町1-89-5
電話 027(3885)9538

行事

◇月次祭

毎月第3日曜日午後2時(基本型)
※第1週の日数が少ない場合は第4週に代わります。

◇新皇祭

2月14日午後2時
※現在少人数のため日程を調整することがあるので、詳しくはお問い合わせ下さい。

◇日高見大祭

3月23日午後2時
※同じく

交通

信越線磯部駅下車、徒歩約30分。バスもあるが本数が少ないので、タクシーを利用した方がよいと思います。

問合せ

大倭出版局まで

——お手紙より—— ◇大倭会の皆様へ

埼玉県熊谷市 得田 典子

(※秋の文化行事の) 10月26日は私と壽之(※平成25年9月帰幽)が待ち焦がれていた日でした。弟(※梅沢家の長男、好弘さん)に「大倭の人達が新皇教宮へ来てくれるよ!」と伝えると、「あ! おれも行く!」とすぐ返事したのでびっくりしてしまいました。(病気が進行して)体が不自由になってしまったので車で行かなくてはと思い、長女のコスモには早めに連絡してあけておいてもらいました(その日はコスモの誕生日でした)。

あつという間の2日間でした。新皇教宮の庭でみなさんと声をかけあつてご挨拶したのは一生忘れません。壽之もそうだと思います。

11月9日に新皇教宮の月次祭に、次女のモモと二人で行つてきました。10月26日にもまして穏やかで空がいつもよりグリーンと高くなったような気がしました(秋だからネーと誰かが言つてるような……)。今まで暗い道を、遙か遠くに見える小さな明るい光をめざして歩んでいたように思います。でも気がつくと、まわりはうつつすらと夜が過ぎて朝もやの中をみんな歩いてるようでした。これからは正覚坊さん(※藤原秀郷公)もいっしょです。色んなことが楽しみです。ありがとうございます(略)

PS 自分の人生は自分で決めて歩んでゆかねば!(略)ちよつと思いつめてないかと言われたような(誰に?),もう少し楽にしてもいいんじゃないの?!!と思つたりです。(略)

決心して実家に帰つて来て5ヶ月、熊谷って何も無い。図書館もすんごくちっちゃい!まわりは田んぼ・畑だらけで自然はあるけど。でも帰つてきてよかつたと思つてます。

拜殿に導かれた平和行進

南無妙法蓮華經

東京都渋谷区 日本山妙法寺僧侶

武田隆雄

平成二十六年十一月二十五日



毎年七月上旬、東京から広島・長崎へと向かう平和行進で、ここ十年来、「交流の家」でお宿をいただきお世話になっております。

今年も梅雨空のむし暑い中、連日、約二十キロの道程を団扇太鼓をたたき、「南無妙法蓮華經」と唱え歩き、「交流の家」にご縁をいただきました。十数名の日本山妙法寺の僧侶と信徒の平和行進団です。紫陽花邑の落ち着いた聖地に夕刻、たどり着く時、不思議として身も心も浄化され、「東方瑞祥法主日聖遥拝の霊地」の碑、拜殿へと導かれ、参拝させていただきました。団扇太鼓を打ち、お題目を唱え参拝させていただきましたが、何の違和感も感じることなく、聖地に参拝申し上げております。聖地にこだまする太鼓の音がお題目の音が木立に、木々の葉に受け入れていただいていると感じます。

「交流の家」では、毎年お世話になっておりますお顔なじみの紫陽花邑の方々の手造りのごちそうをいただき、久しく懇談させていただきました。こちらの平和行進団も中高年主体で、「交流の家」の方々も中高年ですので、話ははずみます。夜、むし暑さのなか就寝し、洗濯の行きとどいたシーツのしいたフトンに横になり眠りにつき、ほどなくして、天然クーラーとなって涼風がほてった体をほどよく冷やし、五欲らんまんの体をやさしくいたわってくれます。まさに聖地のご利生(ニ神仏から受ける恩恵)をいただき、疲れた身心をいやしていただきます。翌朝、拜殿に参拝、朝食後、「交流の家」を出立させていただきました。日本山妙法寺は、矢追日聖法主様の大倭教と同

じく、「信者無し」の宗教法人です。檀家も無く、墓地も無く、ただ僧侶が何の束縛もなく自由に乞食(こつじき)の行をし、四方に立正安国・世界平和を祈念し、お太鼓を打ち、お題目を唱え歩きまわることができるように、藤井日達山主がこしらえた仏教僧侶の集まりです。幸いに、「交流の家」で毎年お宿を受け入れしていただき、平和行進団は助けられております。宗教の本来の目的は、世界平和を作ることです。その時、弊害になるものが、宗教の持つ原理主義です。お互いに仲良く和合することが宗教者の本来の使命であるはずなのに、どうしても和合できないのが宗教者で、とりわけ大組織を持つ大宗教教団です。大宗教教団は原理主義を悪利用し、一部の上層部の利権のため組織防衛に動いています。平和運動は、核兵器廃絶、脱原発、憲法擁護をめざしますが、それらは「政治的だ」という理由で動かさずしないのが大宗教教団です。その時に利用されるのが、原理主義で、「自分たちは絶対正しい」「自分たちは他とは違い優れている」という思い上がりや絶対化し、平和運動に参加しないことで、時の政権の悪政に協力し、権力者を喜ばし続けています。

見田様、高橋様には身体も心も時間もいっぱい使っていただし、本当にありがとうございました。大倭でお会い出来る日を楽しみにしています。



世の中、戦前帰帰で「いつか来た道」を歩み出そうとしている昨今、亀のごき歩みとはなりませんが、これからも貧者の平和行進は毎年、八月六日の広島、八月九日の長崎へ向け歩き続けてまいります。「交流の家」の皆様、毎年の受け入れに感謝しつつ、来年も再来年も皆様とお元氣にお会いできることを心から楽しみにしております。いつも有難うございます。 合掌

田んぼ通信

H 26・12・11

高橋良美・見田瑛子様へ 大和郡山市 中村照美 佐々木友子・華音(娘と孫)

皆様の温かい心が一杯つまった新米(※田んぼの行事参加者へのプレゼント)を送って下さり、どうもありがとうございます。仏様にお供えし全員でいただきました。清らかな澄んだ味でした。法主さんがいつもいわれていた、みんな仲良く、紫陽花の花のように……田植えは、その事を表わせた行事だと思えます。孫もいつも喜んで行かせて頂きました。子供だからというのでなく、一人の人間として大切にしていたかったです。

新ころとからだシリーズ (14) 続・お産にたずさわ리思うこと

神奈川県横浜市 永 飯 あづみ

もう10年位前のことだが、「素敵な年にしよう」と書かれた友達からのメールが蘇る。10代の頃の私は、その言葉に、「自分次第で世界は変えられる」というような印象を受けた。勿論そうであるのだろうが、そうではない部分も、どうやら、私は好きな様である。

物事の間領域、あいまいな領域の事を、グレーゾーンと言うが、なんだか暗い印象がある。暗いものが悪いとか嫌いなわけではなく、むしろちょっと好きだったりする。捉え方次第だと思っっている。白と黒の間は、グレーゾーンではなくてレインボーゾーン。色んな色があるのだ!と思うと、わくわくする。

産科の看護師として働きはじめて5年目。日本舞踊を習いはじめて3年目。唄って踊れる産婆になるのが夢だったりする。産婆(助産師)になるには、助産学校に進学しなければならぬ。助産師になりたいというと、殆どの人は助産学校にいつ行くのかということ聞いてくるし、その為にどうすれば良いかの案を出してくれる。しかし大体のアドバイスは、今の私には実行不可能なものばかりなのである。本当の資格が与えられるまで頑張ろうと自分に言い聞かせる。

そんな「無計画の計画」を生きる私に、編集部から「お産にたずさわリ思うこと」について、助産師として先輩の手塚木咲さんと同時並行で、文章を書いて欲しいと、お話をいただいた。(※手塚木咲さんの文章の方は、昨年11月号に掲載)

助産師の資格は持っていないが、新しい命の誕生にたずさわらせていただいているということ、は、とても嬉しく有難いことである。お産のこゝなららせておけ、思うことはいっぱいあるぞといわんばかりに、嬉々としていた。お風呂のなかや、電車のなか、ぼんやりと考えが巡り、これも面白い、あれも面白い……お産についての文章を書けることを去年から、とても楽しみにしていた。が、実際に、ことに当たってみると書けない。言葉を産み出す苦しみ。年末から何となく文章を産み出すことに挑戦してきたが、こんなにも難産になるとは思ってもいなかった。

母親が産婆であるソクラテスは、「わたしは生むことはできない。産婆である。私は問うことで相手が『自分の考え』を産むの手伝うことしかできない」と言った。そこに産婆の本質をみたような気持ちになった。産婆は哲学でもあり、誰しもが産婆であるような気さえした。締切を何度も促してくる編集部の岸野さんも、もはや産婆だ。誰もが、何かを産み出したい「産婆」であり、誰もが、この世に産まれてきたい「胎児」である。

1985(昭和60)年5月4日(土) 7:48、鹿児島県鹿児島市鴨池、松本産婦人科医院。42歳の母のお腹から、3人目の末っ子として産まれてきた。母の出産は、3人も帝王切開だった。その時、父も42歳。9歳になったばかりの姉と、その年3歳になる兄。私の名前は、私がまだ、母のお腹の中にいる頃に、家族会議で姉の案が採用され、父が「ついに点々の、*づ*にしよう」ということで「あづみ」に決まったとのこと。その頃のはっきりした記憶はないが、私自身の身体に刻まれた記憶というものが、やはりあるように思う。その記憶を辿れば、宇宙へ辿り着く。

母のお腹にやってくる前の頃の私に想像を巡ら

す。38週で産まれているので、1984年の7月8月あたりに、天と地の接点である、この地球にやってきたと考えられる。

《天を陽性、地を陰性とすれば空中と土地との接点がハラ(原・腹)となる。このハラが大自然の恵みによって生命を宿し芽を育てるところになる。宇宙のすべてはこの相對即一体の理によって動いており人間もこの理からのがれることはできない。―「加美のまにまに」より引用》

1984年がどんな年だったのか、Wikipedia(ウィキペディア。インターネット上の百科事典)をなんとなく眺めてみる。読みかけの村上春樹の小説『1Q84』の続きを、その年に流行ったTHE ALFEEの『星空のディス・ダンス』を聴きながら読んでみたくなった。

母のお腹の中で、どんな胎児生活をおくっていたのだろうか。その頃はどんな世の中だったのだろうか。どんな思いをもってこの世にやってきたのだろうか……。パーストラウマ(出産時心的外傷)という言葉がある。私は帝王切開で産まれてきたことに対して、「自分で産まれてこれなかった」という思いがあったことに気づいた。「自分で産まれてきたかったのだ。しかし、姉も兄も帝王切開という形で出産した母は、私を帝王切開で産むしか選択肢はなかったのだ。お産で亡くなる命もあるのだから、自分の命も母の命もあるということ、(自然出産に憧れがあり、自立したお産を追い求めている、病院というシステムが嫌いで、でも病院で働いている私でも)病院や西洋医学に対する感謝の思いがわいてくるのである。エピソードは限りないが……ひとりひとり違ったエピソード(ひとつとして同じものはない)があるとおもうだけで面白い。

やっぱり産婆は辞められないのである。

大倭千一夜

(其の十七)

昭和41(1966)年1月23日発行『大倭新聞』第17号より再録

正月は古神事のなごり

法主 矢追 日聖 (満54歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

日本の伝統

お正月、よろしいなあ。

人間生活の中で、形や心まであらたまるというような節目があつていいものだ。長年の伝統や習慣、それに古代から人々の心の奥に秘められてきた日本人的な土着信仰といったものが、こうした節目を今日までまがりなりにせよ育て伝えてきた大きな原因となったものだと思うよ。

昨日まで鬼のような顔をしていた者が、一夜明ければ、ニコニコと身なりまで整えてお互いに挨拶を交わす。旧年中の心身に積もった垢や穢れを、すっかり洗い流し清めて新年を迎えるという、この「みそぎ」の精神が、お正月が来るたびに蘇る思いがしておめでたいことである。

指折り数えてお正月を待ったところが懐かしいね。今の子供にもそうしたものがあつかしら。暮れのおわただしい大人の世界を横目で見ながら、男の子は店頭にぶら下がる重ねたタコやメンコ、それにバイ、女の子は遊びの中にも板きれをもって、「ひとメ、ふたメ、みやこし、よめご、いつやの、むかし、ななやの、やくし、このやで、とまった」と、数え歌に合わせて羽根つきの稽古をしている。夜の団らんどときには、若い息子や娘たちがぎこちない小倉百人一首の読み声を流していた。

大みそかともなれば、大人たちは屋敷や住居の

すみずみまで大掃除をする。夕方になると二年越しのクソは縁起が悪いと言いつつ、便所ツボは空になるまで美しく汲取ってしまい、掃き清め、

庭には鉄分の含んだ真赤な砂を大海原の波を形どってウロコのようにまき、門口には一對の松飾りを立てた。更に新藁で作った注連縄には、言霊を現わす品々をぶら下げて、新年という神様をお迎えるための準備を整えるのである。

除夜の鐘がすんで、いよいよ新春に入ると、その家の主人は秋に残しておいた畝豆(大豆)を落とした豆木で雑煮を炊き始める。

子供たちは「お年玉」を夢みながらお祝いを待つ。

正月三日は、名実ともにカカア天下。奥さんは、お神さん。お膳の世話などは主人がやる。箒はもたない。正月に入ってきた福の神を掃き出すことをきらったからと思う。

私かね、戸主だったからやってきたよ。私の家は、こうした行事は世間よりもきびしかった。これが家風というのだろうねえ。

霜を薄くかぶった赤砂の上に凍りついた蜜柑の皮がバラバラと落ちていく。新しい羽織にかいたい足袋をはかされ、かじかむ手にベッタをかたくにぎって友達の所へ走る。スリ足で皮をけりながら、振り向いては赤砂の上に勢いよく引かれた直線に微笑を送る。私にはこうした記憶がいまだに残っている。今の子供からは汲み取れないような素朴な、言い知れない楽しみがあつたように思うがね。

「正月きたら何うれい。

お雪のようなママ(飯)食べて、割木(薪)

みたいなトト(棒鱈)そえて。

おこたにあたつて、ねんねこしよう」

大人になると、食うことと、寝ることだけが楽しみの方だった。

形だけでも残す

門松(かどまつ)廃止などの運動が一部にはあるようだが、私はできるならそれがたとえ形だけにしろ、残し保存したい気がするのだよ。

思えば永い歴史の中で、誰から強いられたわけでもないのに、新年の行事の中で、かろうじて細々とその「神ながら」の神事の一面を伝えてきたことは、有難いの一言につきる。

それはね。古代人が、人間を自然から切り離さず一体であるという感覚から、すべてのものが相対的な形を有しながら、実は一体であるということ、理論的ではなく日常生活の中から実感として受取っていたものと思われる。それを「ことあげせず」に形や動作をもって表現してきたものだ。

門松は夫婦の形とその心的内容を神に示し、鏡餅は子や孫の弥栄を祈るために神に供え、特に注連縄は宇宙創成の神威を具象的にあらわしている。陰性、陽性と仮定した二筋の藁木をねじ合わせ、完全に一体となったときの姿を現すに、波状的に噴出する両者一体の気を、白紙で段々のたれを創作し、御幣と称してつけたあたり、まさにかしこみ、恐みだね。

※(其の十五)になる順番ですが、正月にちなみ(其の十七)を今月号に掲載します。

あじさい日誌

12月14日 国政選挙。寒さの中、朝8時から大倭墓地の大掃除。9時から紫陽花邑の大掃除。
 12月15日 大倭神宮月次祭。
 12月21日 有志により拝殿の掃除がされました。
 12月22日 冬至。大倭の大晦日にあたるこの日、大倭神宮、大本宮拝殿、紫陽花邑入り口や邑内各所にそれぞれ門松・注連縄が飾られました。拝殿では日聖祭の準備。

12月23日 大倭七十一年元旦。日聖祭は午前10時、法主様奥津城でのご挨拶から始められ拝殿において祭典が行われました。祭典後は大倭会館で直会弁当を頂き、1時から直会演芸会に移りました。手品や歌、江州音頭等の出し物で和やかに笑いに包まれました。



飛入りの「とっくり音頭」

夕方からは、有志により夕食会のおもてなしもありました。
 12月27日 昇ちゃんば青山山法義・元子夫妻に送ってもらい、夜行バスで弟さん宅(神奈川県横須賀市)へ帰省。1月5日朝元気に奈良に戻りました。
 12月28日 大倭神宮の大掃除。雨の予報があり予定を1時間早め午前9時から始めて、午前中で終了しました。

12月30日 午前9時から大倭会館裏で餅つき神事が行われました。今年も、27日から交流の家で年末キャンプを行っていたF IWCの皆さんが参加。
 12月31日 午後11時半から邑の若者達により拝殿の太鼓が打ち鳴らされました。1年の「まがつみ」を祓う意味で12時まで365回。

1月1日 午後1時からまず紫陽花邑の守護霊さん達に挨拶回りをして、2時から大倭神宮で年始祭が行われました。
 1月5日 午前11時15分から大本宮拝殿において大倭安宿苑、大倭印刷、大倭殖産、大倭大本宮などの社員・職員合同の事始めの会が行われました。
 1月6日 大倭神宮月次祭。雨のため社務所での祭典でした。普通の月は邑倭の会が行われる日ですが、新年は紫陽花邑食事会となるのが恒例です。大倭会館で午後6時から鍋料理。
 1月10日 午後6時から奈良

パークホテル「萬佳」で邑交会の新年会が開かれました。
 大倭安宿苑では
 1月5日 午前10時より茂毛路園あじさいホールで新年祝賀会、40名程が出席しました。(菅原園)
 12月20日 年忘れ会。「スナフキンズ」兄弟による音楽や歌、昼食バイキングやビンゴゲームをご家族と共に楽しみました。(須加宮祭)
 12月23日 大倭会館の直会演芸会へ。
 1月1日 元旦祝賀会。午後からは大倭神宮へ初詣しました。(長曾根祭)
 12月19日(特養)クリスマス会。生クリームやフルーツをデコレーションしてケーキ作り。
 12月24日(アイ)クリスマス会。職員が練習してきた大正琴と鳴子踊りを披露。選んだ風船を割るとプレゼントの番号が出てくるという趣向。

法主帰幽祭のご案内

日時 平成27年2月6日(月曜日)

●午後1時40分より法主様奥津城においてご挨拶をいたします。

●午後2時より大本宮拝殿においてお参り後、平成27年12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのご挨拶をいただきます。

現身はよし朽つるとも永久に
 結ぶ心のかわるものかは

宗教法人 大倭教

あんない

*玉緒祭(大本宮)
 2月3日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じ感謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。
 *月次祭(大倭神宮)
 2月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。
 *大倭会主催第553回祝会
 2月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 *法主帰幽祭
 2月9日(月) 上欄参照。
 *月次祭(大倭神宮)
 2月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。
 *申孝祭と月次祭(大本宮)
 2月23日(月) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。
 申孝祭を、12月4日の金鶏祭と共に建国の記念日として思い起こしましょう。
 ヤマト鳥見と九州高千穂の武力衝突の最中に金鶏の瑞光により「和の心」が示された日であり、和議による国譲りに対して「報恩申孝」の御親祭が行われた日です。詳しくは平成26年7・8月号の法主様の遺稿「大倭神宮伝承の紀」等をお読み下さい。